

# 現代経済文明のメガトレンド

——社会経済と人間精神の転換についての最近の論調から——

永安 幸正

## 目次

- 一、人類社会の構成原理とそのゆらぎ
  - (一)二つの体制と精神的危機
  - (二)アメリカ精神の危機—アラン・ブルームの警告
  - (三)フクヤマ論文—自由主義の勝利宣言
  - 二、グローバル化と文明原理の転換—ドゥラッカーの問題再提起—
    - (一)歴史の境界
  - (二)国家社会への信頼性低下の二原因
  - (三)社会経済システムのゆくえ
- 三、文明のメガトレンド—ネイスビッツ・アバディーン『メガトレンド二〇〇〇』から—
  - (一)もつひとつの長期文明論
  - (二)グローバル経済の展開
  - (三)社会主義と自由主義、双方の危機
  - (四)さまざまな文明領域の変動
- 四、われわれの人間の課題

## 一、人類社会の構成原理とそのゆらぎ

### (一)二つの体制と精神的危機

人類の歴史は、これまでいつも危機を通じて進んできたといえるのではないか。危機は、構造変動すなわちリストラクチャリングという形で現れた。だがその根本には、かならず人間像の危機があった。危機とは、根本において人間像の危機なのであり、それに答えるために、人間像が繰り返し探求され、造り替えられてきたとも

いえよつ。

現代世界も、いま劇的な変動過程にある。それはソ連東欧に見られる社会主義の体制変革が象徴する。特に、一九八九年から九〇年にかけて起こってきたソ連東欧をはじめとする社会主義各国のドラスチックな変化は、おの目を疑うばかりである。もちろん、これが持続するかどうか、どんな方向にむかって進むかは、いまのところまったく予断を許さないが、それでも人間の問題が根本にある。つまり、人間の解放と自由への問いである。現実の社会主義七〇年間の歴史の成果は、もはや将来に約束される理念の実現に希望を引きのばす訳にいかないほど、いくつもの切迫した問題に直面している。

だが危機は、そうした社会主義圏だけではないようである。その一方には、自由主義それ自体にも、そして当然自由主義を根幹とするアメリカ社会にも——またその後を追うのが常である日本にもおそらく——じわじわと危機は浸透していることに、注目しなければならぬ。苦悩しているのはひとり社会主義だけではない。社会主義はいわば鬼子として近代自由主義から生まれてきたのであり、その自由主義そのものも、危機に瀕している。子供の危機とその子に文化遺伝子を供給した母の危機とは、無関係ではない。危機の根は、実はひとつではないのか、とさえ考えられるのである。

自由主義のリーダーとして、自他ともに許してきたアメリカもまた、精神においてその基礎を失いつつあるのではない。経済だけではなく、殺人、麻薬、離婚、セックス犯罪と規律の喪失、そして地球環境危機に高度文明国として責任の大きな部分にコミットしていること……などなど、始末におえない問題が跡をたたない。これらの底には、人間一人一人の生き方の問題が潜んでいるのではないかと考えられる。まさしく現代自由主義の危機、現代産業主義の危機であり、人間の生き方、「道としてのモラル」の危機ではないか。

プロメテウスは、ゼウスから、技術の元となる火を盗み、人類に偉大な幸をもたらしたかのように思えるのに、人類はそれによって生存の危機の崖縁に立たされているのである（佐渡谷重信『アメリカ精神と日本文明』講談社学術文庫、一一一ページ参照）。

#### (二) アメリカ精神の危機——アラン・ブルームの警告

近年、そうした危機的事態を指摘した警世の書が、ほかならぬアメリカで注目を浴びた。それが、アラン・ブルーム『アメリカン・マインドの終焉』(Allan Bloom, *Closing of the American Mind*, Penguin Books, 1987. 邦訳、みすず書房)である。日本人として、その言うところに耳を傾けてみたい。

アメリカは、自由主義圏のリーダーだが、一九六〇年代を境に、健康であったアメリカから、病に苦しむアメリカへと変わってしまった。ブルームによると、それはひとえに、アメリカの精神が「相対主義」(relativity)の魔性にとらわれたからにはかならないという。

ブルームによれば、いまアメリカは相対主義という言葉にむしばまれている。すべての価値、考え方、それにもとづく生き方は、どんなものでも価値が同じで、優劣はない、という意味での相対主義が、とくに若い世代にはびこっている。これは「寛大」(openness)の態度と呼ばれるという。

「あらゆる教育システムは、道徳上のゴールをもつ。それは、実現すべきものとされ、したがってカリキュラムに組み入れられている。」(原文、二六ページ)

ところが、アメリカという共和国では、その二五〇年の歴史の過程で、どんな人間が最善かについて、意見の変化が見られた。

初期には、理性的で勤勉な人間、つまり正直で、法を守り、家族を大切にしている人が、最善の人と思われた。特に憲法にうたわれた「人権の原理」(rights doctrine)、すべての人間は自由であり、平等に造られている、という考えを受けついできた。以前には、そうした「自然権」(natural right)の思想と規範とが生きていたといえる。自然権によれば、「正直で、法を守り、家族に献身する、理性的で働き者の人間」という価値基準が与えられる。これが「デモクラティック・マン」の教育のゴールであった。

だが、とブルームは嘆く。それが今では「デモクラティック・パーソナリティ」の教育へと変化してきたのである。以前は、自然権を認め、人間はみな統一されみな同じという根本前提に立っていて、自然権の光りに照らせば、人間はみな兄弟であると思われていた。今日、「最近の寛大の教育」(the recent education of openness)では、どんな種類の人間でも、どんなライフ・スタイル、どんなイデオロギーをもった人間でも、よいことになった。これでは、「共通の善」についての共通の見方(コモンセンス)がなくなり、社会契約はもはや成立しえなくなったことを意味するのではないか。ブルームはこのように述べている(二六一―二七ページ)

これではいまや、絶対的な規範は存在しないことになった。絶対的な規範があるとすれば、それは他から指図されないという自由のみである。どんな生き方も、他を圧して自己の絶対を主張することはできない。各々は、自分の生き方が、他を否定するほど絶対ではないと知る。その意味では、すべての生き方が相対的である。がしかし、同時に、どんな生き方も他から否定されることはない。その意味では絶対であり、それぞれに存在理由を認められると考えるのである。

これは矛盾であるが、このような自由の共存が「寛大」というものであり、またそうした寛大が「自由」ということになるのである。こうして、相対主義は、絶対の基準を与えていた自然権を乗り越えたといわれるのである。これは「自然権なしの自由主義」であるといえよう。

ちなみに、ブルーム教授は、なんとこうしたアメリカの潮流の根源に「ドイツ・コネクション」(ドイツとかかわり)というものを見いだしている。それは、こうした相対主義がドイツの思想家ニーチェの「神は死んだ」という宣言と関係し、そうした見方がフロイトとウェーバーとを通じて、アメリカの思想界に深く浸透してきているからであるという。アメリカはドイツのニヒリズムに侵されているというのである。折しも、欧州では東西ドイツが統一の機運にあるが、それはベルリンの壁が取り払われたときには熱狂的に歓迎されたが、その後統一となると必ずしも手ばなしでは歓迎されていない。その微妙な空気の源の一つがアメリカのこうした認識にもあるのではないか。やはりドイツは、欧米にとって「問題」なのであるか。

では、ブルーム教授は、どうせよというのであろうか。教授は、教育にかけているようにも見える。しかし思うに、自然権思想とそれに基づく自由主義自体が、本質的に相対主義であることを知らない、何の方策も出てこないのではないか。アメリカ建国の基礎にある自由の概念は、その独立宣言と憲法をみれば明らかである。人間は神によって造られ、自由とは被造物としての個人の自由であり、次いで国家の介入を排除するという意味の自由であり、その中では各自は他の人々の自由を制約しないかぎり、自分の意志に基づいて最大限の自由をもつとする。こうした自由の考えは、最近ではノジック(Robert Nozick)ら「自由主義者たち」(リバータリアン)の論調において、洗練された姿を現している(*Anarchy, State, and Utopia*, Basic Books, 1974)。

ここには、神にしたがうか否かということでも争いさえしなければ、「人間どうしてはだれも価値は同じ」という相対主義が込められているのではないか。しかしこれは、同じように信じる共通の神が造られたものだからみな価値が同じというのは、全く違った同一観である。神なき自然法論と人権論では、神の信仰が薄くなるとたち

まち相対主義になる、というような構造になつてはいないか。ブルームは、そうした疑問に、どう答えるのであろうか。後に見るように、またしてもドイツ文化から生まれたドラッカーが、この点について深い洞察を披瀝しているのである。人間は、不完全さにおいて等しい、それが自由主義の前提である。完全な人間ということは、自由主義と両立しないと。

### (三) フクヤマ論文——自由主義の勝利宣言

アメリカについては、他方で、まったく楽観的ともいえる反対の見方が提出されて、単純思考に走り易いアメリカ・インテリたちの中で、賛成と反対との轟々たる議論を引き起こした。フランシス・フクヤマ論文「歴史は終焉するか」(The End of History? The National Interest, Summer 1989.)がそれである。これは、自由主義の勝利宣言ともいえるものである。ただし、現実の勝利というよりは、「理念」(ideals)の勝利宣言である。社会主義も共産主義も、結局、西側の自由平等の理念、それに民主主義の理念に賛成せざるをえなくなつてきているというのである。それが、社会主義各国の混乱と重なつたから、余計に波紋を広げた。「社会に影響を与えた思想こそが問題なのだ」というマックス・ウェーバーの着眼は、ここでも妥当する。

フクヤマは、ヘーゲルを間接的に摂取し、歴史の弁証法的見方を駆使して論陣を張る。歴史の終焉とは、一口に言えば、マルクス主義的社会主义の破産の宣言に外ならない。社会主義の理念は、その現実の困難ゆえに破産した。少なくとも理念においては、自由主義は勝利した。アメリカ革命とフランス革命とにより確立された自由主義理念は、あらゆる政治体制が向かうべき理念として、揺るぎない地位を打ち立てた。

ただしそのあとは、平板で退屈な歴史の大地がまえに広がるのみである。「歴史の終わりは、極めて物悲しい時代となろう」とフクヤマはいっている。いわく、

「物のとらえかたでの競争、純粹な目的を目指して命を懸けること、情熱・勇気・イマジネーション・理想主義などを動員する世界的規模でのイデオロギー闘争、こういったものはなくなり、代わつて経済的計算、技術問題を果てしなく解くこと、環境への関心、そして洗練された消費者の需要を満たすことなどが、その中心になる。」「ポスト歴史の時代には、芸術も哲学もなくなり、あることといえば、ひたすら人類の歴史の博物館の維持だけということになるであろう。」(以上、原文、一八ページ)

これは、皮肉にも、「新しい思考」を宣言し、階級闘争や国家利益を優先するナショナリズムやイデオロギーの枠を越えることの必要を訴え、全地球的な環境危機など、人類的な価値の問題に取り組もうというゴルバチョフの提言と、一脈通じるものがあるとはいえないか。

ただし、注意しなくてはならないのは、フクヤマ氏が「理念の勝利」といつて、「現実の勝利」と決めてはいないことである。自由主義も、現実には多くの深刻なる課題を生み出しつつあるからである。

ここで思い起こされるのは、シムペーターの歴史予測である。すなわち、資本主義は、失敗するからではなく、成功するがゆえにその歴史的使命を終る、という見方がそれである(『資本主義・社会主義・民主主義』邦訳、東洋経済、参照)。この地球上から、資本主義はまだ歴史の使命を終えて消えてはいない。ということ、まだ十分に成功しきっていないということでもあろうか。自己から生まれた異端児である社会主義圏まで呑みこんでいくという、資本主義のグローバル化の使命が、いまだ終わつてはいないということであらうか。

とはいえ、一つの理念というものは、そんなに万能ではないだろう。人々は一つの価値には、あるいは一つの表現には、飽きるという反応を見せるようである。だから、自由主義という理念を掲げても、現実の自由主義体

制には、拒否反応を示すことがある。選挙を通じての政権交替は、それゆえに起きる現象であらう。

だが、歴史というものは、こうした自由主義か否か、という視点からだけでは解けないのではないか。

この点で、ピーター・ドラッカーは、半世紀昔の一九四二年に書いた『産業にたずさわる人の未来』(The Future of Industrial Man, 1942.) において、自由主義の偉大さと、しかしまたそれへの過信の戒めとを発している。彼は以下のようにいっている。

「アメリカ合衆国は、帝国主義とはいわないまでも『帝国』のような国になるほかない。ということとは、合衆国が大国だということ、この事実はいまでは無視できないということに落ち着く。政治は理念の領域に閉ざされてはありえない。政治の主な任務は、その理念を制度という現実に映し出すことにある。その道具は権力である。イギリスは昔、『キリストを唱えながら棉花を考えている』とたびたび非難——どっちかといえば馬鹿げた非難——をうけたものだが、合衆国が世界列強の一つとして『棉花』といいながら『キリスト』を考えているとなつたらなおよくないことにならう。昔からアメリカ人は、こういう危ない偽善の逆を銜いすぎた。アメリカ人は高遠な理想を追って努力していながら、いつも物質的な、『実用向き』な利得のほかには何もいらぬようなふりをしてきた。これでは自分自身をさえ欺いている。(中略)

つまるところ合衆国は、世界列強の一つとして——おそらくは世界最大最強国として——その持てる『力』を政治的に活用しなければならぬのは必定である。これを権力として活用することである。しかし、『アメリカの世紀』という言葉が、合衆国の物的優位だけを意味するものなら、二〇世紀はむだな世紀になるだらう。」(『ドラッカー全集』①、グイヤモンド社、一九七二年、四二八—二九ページ)

また次のようにも述べている。

「自由の唯一の根拠はキリスト教の教える人間本性の考えである。不完全で弱いもの、罪を犯すもの、塵より出でてやがては塵に帰るもの、それでありながら神のかたちに作られて、おのが行いに責任をもつものという人間本性の考えである。人間を本来不完全なもの、一時的なはかないものとして変換することがないと見ればこそ、自由は哲学上自然でもあり、必要でもある。また人間を不完全なもの、一時的なはかないものでありながら、本来その行為と決定について責任を逃れる途のないものと見ればこそ、政治上、自由は必要なばかりか、ありうるものになる。人間は完全だという哲学はみな自由を否定する。また倫理上の責任を認めない哲学も自由を否定する。……人間が完全だとか、完全になれるという仮定は、選択という人間の権利と義務を否定するものだからである。」(『ドラッカー全集』①三二八—二九ページ)

自分の事がよく分からなくなるのが、大国たるものの資格ではないかとさえ思わせる。先に見たブルームの徹底な自然法論的自由主義論を思い起こされたい。大国の人ブルームは、自分の自由論の本質が分からないらしい。

ドラッカーのこの警告は、ドイツにナチズムをかざすヒトラーが出現し、ソ連にマルクスレーニン主義をふりまわすスターリンが支配して、ともに資本主義への挑戦を行いつつあったころの警告であり、また診断であった。まことに意味深長な診断であった。それから半世紀のち一九九〇年三月、ソ連では、ゴルバチョフが強大な権力を手中にした大統領制が発足した。かれは、プラグマチストらしいが、自己の権力の至上化という過去の人たちの轍を踏まぬことを祈るばかりである。

ドラッカーのこの警告は、アメリカに対しては、理念だおれにならないように、という警告であり、また自由というものは、「自己の不完全さ」を自覚することを欠いては成り立ち得ないものであるという反省でもある。自

由という旗印にことよせて、相手を「アンフェア」といつて居丈高に批判するのがよいという時代である。この文章の書かれた半世紀後のどこかの大国の子孫は、国際交渉のときに、よくよく味わうべき言葉ではないか。自由主義は、自由主義でないものを敵として見付け、それと戦い続けていなければ、自己を維持出来ないものだろうか。

## 二、グローバル化と文明原理の転換

### ——ドロッカーの問題再提起——

#### (一) 歴史の境界

一九三〇、四〇年代、若いころのドロッカーは、以上からわかるように、単なる経営学者ではなかった。むしろ新進のとはいえ、いっばしの社会哲学者であった。彼の目と心には、西洋近代の歴史の運動と人間の問題が、いつもとどめられており、その本質が見据えられていたようである。そして彼には、今世紀末にはいつて、五〇年昔の問題意識が再びよみがえってきたのではないか。歴史の転換の問題がそれである。新著『新しい現実』(The New Realities, Harper & Row, 1989, 邦訳、グイヤモンド社)は、今世紀末から来世紀への、鋭くかつ情熱的な洞察に溢れている。

いわく、遠目には平板な大地にも、近くで見ると上がったたり下がったりする起伏があり峠があつて、いろいろな変化があり境目があるものである。だが、それは本当の境界ではない、とドロッカーはいう。歴史には時折、「本当の境界」とでもいふべきものがある。歴史には、本当の境界があるもので、その先には、今までになかった新しい現実が開けてくると。

ドロッカーは、人類が、とくに石油ショックを経験した七三年、あるいはその少し前を境にして、そうした真の境界を通過したという。その百年前の一八七〇年代にも境界を越えた。一九七〇年代は、その百年前に開けてきた古い現実を乗り越える新しい現実へと進み行くことになる。

新しい現実、色々な点に現れているとされているが、以下では次の点に注目したい。

- ① 最後の一九世紀的植民地帝国であるソ連帝国の終焉
- ② 社会による救済という思想と実践の終焉
- ③ グローバル経済の発展
- ④ サード・セクターの台頭
- ⑤ ビジネスからマネジメントへ
- ⑥ 分析から知覚へ——新しい世界観

新しい現実、まずロシア・ソ連帝国の崩壊への始まりに象徴される。一九世紀には、ポルトガル、スペイン、オランダ、イギリス、フランス、そしてアメリカなどという欧米列強による帝国主義時代が花盛りであった。ソ連はその時代のロシア帝国を引き継ぐもので、社会主義という看板を掲げてはいるが、旧帝国最後の生き残りである。ゴルバチョフのペレストロイカを契機に民族の自覚が噴出し、民族独立を主張し始めたわけである。

ペレストロイカは、失敗すれば失敗したて民族抑圧への反発は強まるし、成功し豊かな自由社会に接近すればする、それでまた民族自立の要求は高まるであろう。いずれにしても、最後の植民地帝国ソ連は瓦解するほかにいであろう。ドロッカーはいう、「中核的な問題は、民族主義と反植民地主義の高まりからくる『ロシア帝国』分裂の危機である」と。

ロシア帝国は、他民族の隷属のうえに成り立っており、他民族のロシア化政策を徹底させた。そうした「ロシア化政策に対する非ロシア系民族の憤り」こそが、ロシア革命においてレーニンを勝利に導いた要因のひとつであったという。レーニンは各民族に対して、文化と教育についての完全な自治を約束したが、それが十月革命を成功にみちびいたレット人狙撃隊の支持をえたという（邦訳、四五ページ）。

ペレストロイカは、それゆえ矛盾を中にかかえている。それは、成功すればするだけ、豊かになり、移動の自由が高まり、教育程度が上がれば、人々はそれだけ民族主義的になり、植民地であるということに我慢が出来なくなる。「ロシア」という「帝国」はもはや存在しないことになろうという。

たしかにソ連は、いわば帝国主義という一九世紀の旧秩序が、社会主義という衣を着ることで一時的に延命し、二〇世紀末まで生き延びたものといえるが、そうした一九世紀秩序もいよいよ解体しつつあるといえるであろう。ソ連は自己を変革する外ないであろう。

## (二) 国家社会への信頼性低下の二原因

ドラッカーによると、次に注目すべきは、「社会による救済」という時代の終わりという事実なのである。一九世紀七〇年代は、古典的な自由主義の終わりであったという。ということは、そのころから、国家というものがいわば万能であり、国家社会によって人類は救済されるという思想が勝利したことを意味するのである。

そのような社会救済の思想は、一八世紀のルッソーにはじまると、ドラッカーはいう。中世には、人々は神への信仰により救われると考えていた。それが、福祉国家やケインズ政策などに見るように、「社会による救済へ」と世俗化したわけである。

思うに、一九世紀マルクスの社会主義・共産主義論、それとイデオロギーは正反対であるが、ヒスマルクの福祉国家論、そして二〇世紀のスターリン、ヒトラー、あるいはニューデール、ケインズ政策など、それはみな同じく、ドラッカーの言うような意味で、「社会による救済」という信仰の系譜上にあるものである。その点において、共通性を見いだせるものである。

ドラッカーによると、社会による救済という思想は、終焉するほかない。もはや人々は、集団的な力をもってしても、完全な社会、あるいは完全に近い社会をつくれるとは期待しなくなった。いわんや、人間を根本的に変え、新しいアダムをつくれるとは考えていない。社会的な問題に唯一の正しい解答があるとする考えが、ますます疑問になってきたという。

ヨーロッパでは、中世の人々は「信仰による救済」を信じていた。日本でも、中世の時代には、人々は信仰による救済という道を捨ててはいなかったと思われる。それが、近代になると、国家社会による救済に希望をかけるようになった。

だがそれが破産しつつある。これからあるとすれば、「新しい救済」は、「社会による救済」ではなく、個人による個人の救済、社会からの逃避による救済となるのであろうか。だが、信仰による救済も、自由放任による救済も起こっていない。その兆しはあるのか、疑問であろう。

こうした国家の救済能力への信頼性喪失という価値の揺らぎの風潮は、もう一方でさらに促進されつつある。それは、グローバル化の影響によるものである。今地球的規模の新しい現実が起きて来ている、とドラッカーは指摘する。それは次の一連の動向である。

### ① グローバル経済の出現——貿易、資本・金融、情報などの領域で進行

## ②グローバル企業の出現

## ③国家の相対化、国家主権の衰退

## ④ECなどのようなブロック経済の出現

人類の経済は、これまで国家を単位とし、国家と国家とのあいだの国際関係という形で行われてきた。ところが、貿易にとどまらず、資本・金融、情報は国境を越えて広がり、「グローバル経済」というべきものが出現しつつある。また、それにもなつて、国家にしばられない企業が、大小にかかわらず、国境を越えて活動しはじめている。それは「グローバル企業」と呼べるものである。

こうしたグローバル化にともない、絶対であった国家主権が、ますます相対化する。国境の壁が低くなる。しかしながら、そうかといって、世界は境目のない様な自由交易の場になるのではない。むしろ、ECのような地域ブロックが幾つも形成される。

それでは、そのようなグローバル化経済を指導する経済政策の原理はどうなるのか。ドラッカーははっきり述べてはいないが、それは、もはや古典的な自由主義ではありえないであろう。そのような古い自由主義は、百年前の一八七〇年代に、自由主義から国家主義への移行にもなつて終わつたと、ドラッカーは見るからである。

私は、これからは、自由貿易でもなく、保護主義でもなくて、「相互主義的自由主義」(reciprocal liberalism)となるのではないかと見る。

「相互主義」(reciprocity)とは、お互いにゲームのルールや結果を等しくするようにという考えである。いつてみれば、アメリカでも日本でも、同じルールであること、そして願えることなら、ゲームの結果もバランスすればよいという考えである。それに対して、古典的な自由主義は、ルールが等しければ、それに基づく競争の結果に格差があつてもよいというものである。その限りでは、古くから「互恵」と呼ばれてきたものにあたる。ところが、新たな相互主義は、結果の均等までも要求する。結果平等主義といわれるゆえんである。

## (三) 社会経済システムのゆくえ

さらにドラッカーは、新たな社会体制の動向を占うものとして、サード・セクターの台頭に注意を促している。サード・セクターとは、いわゆる「第三セクター」であり、非営利で、かつ非政府的な機関からなる部門である。その例としては、病院、学校、教会、さまざまなボランティア団体、国際的な慈善団体などがあげられている。日本でも第三セクター方式といって、鉄道などに増えているが、公共機関と民間会社との合弁で行われる方式がある。ただ、ドラッカーはそうした合弁方式にはあまり言及していない。

もう一つの重要な傾向は、「ビジネスからマネジメントへ」と呼ばれているものである。これは、非営利機関に営利機関の合理的経営方式(マネジメント)が取り入れられるということである。過去のビジネスの成功によって、政府機関、病院、軍、博物館……等々でマネジメントを意識するようになっていく。ビジネス・スクールがマネジメント・スクールと改称する時代である。

それと裏腹の関係にある傾向であるが、ビジネスの価値観が人々の確信と献身の対象ではなくなっていることを知らねばならない。ビジネスはもはや目的ではなく、手段に過ぎない、というのである。

しかし、手段なくしてはなにもできないこともまた現実である。これからは、知識が真の資本となる。ペーコンが述べた「知は力なり」というのは、二〇世紀末から支配する新しい現実であるといえる。ドラッカーはそれを「分析から知覚へ」と名付けている(邦訳、三六九ページ)。



「分析」とは、人間の特定の理性に基礎を置く活動であり、「知覚」というのは人間の感覚、感性に基礎を置く活動のことである。ドラッカーは、理性という人間力の一部でなく、人間力の総合的な開発と活用とに着眼する。それを知覚と名付ける。

これは、新しい知の生産システムが必要になっていることを物語る。

「問題は今日、学界の専門家たちの学識が、急速に、本当の知識ではなくなってしまったことにある。それらはせいぜい専門知識にすぎず、悪い場合には、しかもそのほうが一般的だが、たんなるデータにすぎなくなってしまったことにある。」

しかも、過去二〇〇年間にわたって知識を生み出してきた学問の体系や方法論が、少なくとも自然科学以外の分野では、今日きわめて非生産的な存在となっている。」(三六七ページ)

これはまことにきつい批判であるが、一面の事実をついていることは、否定できないであろう。

ところで、ドラッカーは、すでに一九三〇年代に『経済人の終わり』(The End of Economic Man, 1939)を著して、ビジネスからマネジメントへとというテーマを述べている。

「歴史の連続が断ち切られたのはいまがはじめてではない。これまで二度、一三世紀と一六世紀にヨーロッパの秩序が崩壊している。……秩序の崩壊は二度ながら『人間』の意義はここにあるという信念の解体によることは、いまと同じであった。一三世紀には精神人、一六世紀には理知人、これらの考えは二つながら解体した。精神なり、理知なりにもづく社会では、人間生活のなかの、そういう領域だけが社会的に意義あるものと見られたのであるが、そこでは自由と平等を現出来ないとわかったためである。精神なり理知なりにもづく組織だてられた社会が、見たところその完成が間近になったときくずれたのは現代と同じである。中世初期の神聖

ローマ帝国と、清教徒改革派の聖者社会がそれである。」(『ドラッカー全集』①、グイヤモンド社、一八二ページ) マルクス主義も、カルヴァン主義も、自由平等の社会がいつかは到来すると信じ、そのためには「現実の自由」をすてなければならぬとし、双方とも、その実現すべき社会が、自由のない社会に過ぎぬとわかったとき、秩序であることができなくなった。人々は世界の終末を描いていた。

だが、すでにそのころ、「アカルトやイギリスの大政治家たち」が、経済人の新しい社会と、新しい秩序の基礎を築いていた。

来るべき社会では、経済人の社会が崩れる。ここでは、またもや自由平等の実現を目標とする。だが、どの領域が「社会本然のもの」になるか、われわれは知っていない。しかし、「いまでは意味を失った経済の領域」でないことだけは確かである。

「自由と平等は社会本然の中心領域」と考えられる領域のものでなければならぬが、この領域では自由は約束されるだけで、実現されることはない。ある領域で自由平等が実現されるのは、他の領域が社会本然の中心となつたあとでできることである。

宗教上の自由と平等が実現されたのは、そうした宗教的精神の領域が社会の中心と思われなくなったときであり、政治的自由平等は経済のほうに名誉と満足の基盤が移ってからであった。

「経済上の自由平等は、経済的なものが社会でいちばん大事なものと思われなくなったとき、すなわち新しい領域にある自由と平等が新しい秩序のもたらす約束になったとき、はじめてできることなのである。」

「追えども及ばぬ自由と平等を絶えず求めてやまないところに西洋文明の歴史の動力がある。……西洋文明の特徴は、動的であること、救世的であることに見いだされる。」(以上、①一八二―一八三ページ)

ここには、ヘーゲルばりの気負った調子で、自由平等の歴史的弁証法が語られている。確かにいわれるように、自由平等はひとつではなく、人間生活のそれぞれの領域にそれぞれの自由平等があり、ある時代には主にある一つの領域での自由平等が目され、次には別の領域で自由平等が求められるといえるのではないか。

人は処女作に向かって完成するというが、ドラッカーもまた人であることを、人生航路をとおして、みずから語っているといえる。若いときの問題意識と、『新しい現実』における問題意識とは、自由を求める体制とは何かを問う点において、一貫しているからである。だが、歴史は人の一生を越えて進むし、人にもドラッカーだけではかぎらず、色々と異なった人がいる。

われわれは、歴史が次々と著す書物に遅れないように、その解説の作業を休むわけにいかない。社会による救済が色あせた今、そこからのみ人間の救いへの新たな解答も見付かるであろう。希望を失ってはいけない。持続する希望は必ずや現実化するであろうから。

### 三、文明のメガトレンド

——ネイスピッツァバディーン『メガトレンド二〇〇〇』から——

#### (一) もうひとつの長期文明論

欧米キリスト教には、「千年王国」(Millennium)という歴史観がある。それは、仏教に「末法思想」があるのと同じであろう。それから見ると、二一世紀は第三番目の千年の始まりであり、一九九〇年代はそれへの前夜にあたる。ドラッカーは数百年単位の経済文明サイクルを語ったが、この点からすればもっと長期の視野が可能であろう。日本人は、九〇年代はどうなるかというような、五年、一〇年の短期的視点を捨てることである。国家百

年どころか、そうした千年の展望を回復しなくてはならない。

これから取り上げるネイスピッツは、すでに『メガトレンド』によって日本でも知られているが、今回もアバディーンと共著で、二一世紀に向けてのメガトレンドを描いている。それによると、九〇年代の動向は次のように二〇の傾向としてつかまえられる。

- ① グローバル・エコノミーのブーム
- ② 環太平洋圏の台頭
- ③ 自由市場的な社会主義の出現
- ④ 福祉国家の破産
- ⑤ グローバル・ライフスタイルと文化ナショナリズムとの摩擦
- ⑥ 女性リーダーシップの時代
- ⑦ 生物モデルの時代
- ⑧ 芸術ルネッサンスの時代
- ⑨ 信仰の復活
- ⑩ 個人の勝利

ちなみに、過去三〇〇年間、世紀末には文明論が盛んであり、それぞれの時代に主要である領域で文明が論じられた。

二〇〇〇年昔は、一八〇〇年代後半に、経済が論じられ、アダム・スミスが道徳、法、経済にわたる体系を繰り広げ、その自由経済論のインパクトが大きかった。

一〇〇年前の一九世紀から二〇世紀の初頭には、自由経済ももちろんであるが、それに加えて民族や国家の危機が盛んに論じられ、社会主義からの時代批判も激しくなった。今に残るものには、マルクス・エンゲルスの資本主義批判と社会主義論はもちろん、シュペングラーをはじめウェーバー、レーニンらのものがある。その中心課題はやはり政治経済であるといえる。

現在はそのような一〇〇年の終わりであり、かつまた第三の千年の開始時期と重なる。経済自体のリストラクチャリングが、グローバルな情報化の流れとからみあって、新たな文明論を呼び起こしているといえる。ネイスピッツらの議論は、やはりそうした情報革命下での経済と産業の構造変動、その高度化という歴史動向を背景にして出現しているものであるといえる。

## (二) グローバル経済の展開

ネイスピッツたちの場合でも、ドラッカーと同じように、経済のグローバル化が基本的な潮流として認められている。

まず第一に、「グローバル経済」の傾向を見よう。

九〇年代は、世界的なブームの時代となろうという。グローバルな自由貿易の拡大が進むと見られている。ことに、アメリカ・カナダ自由貿易協定、オーストラリア・ニュージーランド自由貿易協定、ブラジル・アルゼンチン自由貿易協定など、自由化が地域的なブロックの形で進むだろう。この点は、ドラッカーによる予測と軌を一にする。

こうしたなかで、巷間ささやかれているいわゆる「アメリカ没落神話」は当たらないと著者たちはいう。アメ

リカは没落しないと知るべきであるという。アメリカは世界生産の二五%を世界の人口の五%でもって支えている。アメリカは、ノーベル賞が一八八なのに、日本はわずか五個ではないかという。

さらに、アメリカは一九八九年に移民を六四万三、〇〇〇人も受け入れた。そうしたこともあって、一九九〇年代には、アメリカはどこよりも多くの若い労働力を擁する国家となろう。これからは、情報化により高賃金経済が可能となろう。ECも、政治的統一抜きだが、アメリカ合衆国のようなものになるだろう。ネイスピッツたちはこのように見通している。

第二は、「環太平洋圏」の動向である。

世界的に言えば、五〇〇年前、世界の交易センターは地中海から大西洋へと移動を開始した。現在は、それが大西洋から太平洋へとシフトしつつある。世界の都市も、ニューヨーク、ロンドン、パリから、ロサンゼルス、シドニー、トキオウへと移りつつある。しかもそのシフトの速度が前代未聞である。経済のみでなく文化も、同じ潮流にある。東京は今や、ファッションのセンターでもある。

だが、現在は日本が支配的であるものの、やがて東アジアの中国、韓国、台湾、ホンコン、シンガポールが日本を追い抜くであろう。こうした環太平洋圏の発展は、教育の振興により促進される。しかし、同時に西洋の発展のすすむことが、世界の調和には望ましいであろう。

## (三) 社会主義と自由主義、双方の危機

このようなグローバル化は、地球社会の二大圏である社会主義国家と自由主義国家の双方に差し迫った変化を求めている。

それがすなわち第三の動向、社会主義圏の変化である。それは、「市場社会主義」の出現にはかならない。ネイスピッツによると、古典的社会主義没落には以下の六つの原因があげられる。

- ① グローバル・エコノミーでいかなる国も自給体制は困難となること
- ② ソフト技術、ことに電気通信、金融のグローバル化

③ 中央集権の失敗

④ 費用のかさむ福祉型社会主義の困難

⑤ ブルー・カラー労働者の終焉

⑥ 情報経済で個人の重要性が高まること

ゴルバチョフのペレストロイカ、東欧の雪崩現象は、以前から表面化していた国民の経済生活の困難、国家財政の危機、ハイテク領域での立ち遅れに対する危機意識に発する。もちろん、社会主義の理念にとって代わるものがかれらにとってそう容易に見いだされるとはいえまい。巷間やかましく言われるほどには、簡単に社会主義の概念の変質を説くことはできないと思う。

が、社会主義の「立て直し」(ペレストロイカ)は、ちょうど資本主義にとっての一九三〇年代における「ニューディール」に匹敵するともいえる。それが国家と経済の関係についての立て直しであったのと同様、ペレストロイカも社会主義という体制の違いはあれ、国家と経済の関係についての再構成である。

社会主義の路線変化は、ヨーロッパ社会主義にも当然起きている。八九年六月二二日に、ストックホルムで「社会主義インター」一〇〇周年会議がもたれたが、市場経済を承認し、産業の国有化を否定することとなった。

他方、自由主義圏ではとくに第二次大戦終了後、高度福祉国家が追及され、その政策論的基礎にケインズの理

論が採用された。そこから第四に「福祉国家の民営化」という動向が指摘されているのである。この分野では、英国がモデルであろう。戦後福祉国家のモデルは英国であったが、その解体でも英国がさきがけることになった。労働党大会ですら、保守党が民営化した事業を再度国有化するという案が、二対一で否決された。世界的に、民営化は英国方式をとる。

福祉国家は「ウェルフェア・ステイト」(welfare state)というが、ネイスピッツらはウェルフェアよりむしろ「ワークフェア」(workfare)という考え方が重要となるだろうという。所得の公的保障でなく、より良い働き口の確保が求められる。人間は政府支出に頼るよりもみずから額に汗して働くほうが良い。中産階級の人間と、働くことができる母性は、働くという傾向が強まる。政府の福祉保障を得るものは、職を得るといっまじめな努力をするという約束を政府と交わすべきである、ということになる。

ここで生まれる新たな問いは、自分で生活費を稼げない人々に対する政府の正当な責任とはなにかである。また、そのような人々を政府に依存させないで、あなたはいかに支援するか、という問いでもある。

これからの基本的傾向は、以下のようになろうという。

- ① 公共住宅から持ち家制度へ
- ② 国家健康サービスから個人の選択へ
- ③ 政府規制から市場メカニズムへ
- ④ 集産主義から個人主義へ
- ⑤ 国家独占から競争企業へ
- ⑥ 国営から民間企業へ

⑦ 国営から雇用者所有制へ

⑧ 政府社会保障計画から民間保険・投資へ

⑨ 課税増加から課税引き下げへ

これが、福祉国家のリストラクチャリングの主要局面である。こうした一般的傾向は、現代社会主義国家でも進んでいる。ソ連経済は国家財政赤字に悩み、また初めから国庫納入が押し引きされることに目をおおって「税金のない国」などと誤って宣伝された北朝鮮経済なども、どうやら強度の経済不振に陥っているやに伝えられる。社会主義経済も、財政問題には頭が痛い。

国家が経済に演じる役割について、東でも西でも、人類は再検討を迫られている。しかしそれは、単純な市場主義者が期待するように、すべてを市場に委ねればうまくゆくとはいえない。市場を生かしつつも、さらに新たなシステムが模索されねばならない。

第五は、「グローバル・ライフスタイル」の形成であり、それと「文化ナショナリズム」との摩擦が登場する。これは、国家の枠組みとそれをこえる文化とのズレである。食物、ファッション、歓楽などがグローバル化する。貿易、旅行、テレビがグローバル・ライフスタイルを形成するうえでの基礎となる。

文化的な貿易収支からみると、一九八二年フランス文化相ジャック・ランの発言にあるように、「アメリカ文化帝国主義」が批判される。「セサミ・ストリート」は八四カ国で放映され、英語は国際語となる。世界で一〇〇万以上のコンピュータにストックされている情報の八〇％以上が英語による。

しかし、経済と情報のグローバル化とともに、逆に文化の個性化が起こるのである。言語をはじめ自己の文化への固執、外国からの影響への反発もある。同質化の傾向に反して、固有文化を守ろうとする反発も強まる。ネ

イスピッツたちは、ウェールズ、ケベック、カタロニアなどがそれであるという。

ソ連東欧などの社会主義圏でも、そしておそらく近くはアジアやアラブなどでも、民主化の波に洗われて、第二次大戦後に形成された国家と民族の關係に、新たな組み替えが起きるのではないか。

#### (四) ささまざまな文明領域の変動

文明の構造変動は、家族システムや仕事場でも、そして政治システムでも、必ず性的分業の組み替えを伴わずにはおかない。そこから第六の変化は「女性リーダーシップの時代」ということである。

事実、ビジネス界への女性の進出にはめざましいものがあり、過去二〇年間に、アメリカでは情報分野で新たに創造された数百万の仕事のうち三分の二は女性が占めた。女性は、単に経営にたづさわるのみでなく、リーダーシップをとるようになる。ネイスピッツらは、軍事組織モデル以外では、男と女の協力は素晴らしい成果を生むであろうという。

また、新たな企業の元型は、より母性らしく、ということになるのではないか。マイケル・マコービーは「なぜ働くのか」で、これからの専門職人は「自己開発者」(self-developer)であると述べている。工業時代、女性は無視された。忘れられたのである。これから九〇年代の課題は、高等教育を受けた人々をいかに企業家的、自己管理的かつ生涯学習的にするかということである。

第七は「バイオロジーの時代」が訪れることと、そのインパクトである。

人々の思考は、物理学のモデルと比喩から、生物学のモデルと比喩の時代へと移るであろう。物理学の比喩は、エネルギー志向、線形、マクロ、機械的、決定論的、外からの指令で動くというものである。それに対し、生物

学の比喩は、情報志向的、ホーリスティック、ミクロ、内発的、適応的というものであるという。この領域では、特に生命操作をめぐる、倫理問題が深刻化するであろう。

第八は「芸術のルネッサンス」であるという。

一九六五年以降、アメリカの博物館入場者は二〇〇万人から五〇〇万人へと増加した。八八〜八九年にプロードウェイは観客動員数で新記録をつくった。一九七〇年以來、オペラ観客数はおよそ三倍増となった。世界でもっとも訪れる人が多いのは、エッフェル塔(四〇〇万人)でもタージマハールでもなく、ポンピドー・センターである。それは八〇〇万人を集めるという。

第九は「宗教の復活」である。

キリスト教の「千年説」(Millenium)によれば、最初の千年の末、中世の終わりころ、人々は世界の終末を信じていた。けれども終末はこなかった。かわって科学技術時代が訪れた。だが、現在、科学と技術への盲目的信仰は疑われている。多くの人々が、何を依り所とすればよいか、当てがない。

だが、主流宗派は後退しつつあるという。「メソジスト会」(方法派)は六五年の一〇〇万人から九〇〇万人へと減少した。ベビーブーマー世代(一九四五〜五四年生まれ)は、「信仰はイエス、しかし組織教団はノー」と答える。ニューエイジ・ムーブメントも無視できないという。近代は啓蒙と進歩史観の時代、「ユートピア」(どこにもないものという意味)時代であったが、それへの懐疑から、二〇〇〇年に近付くと、「デストピア」(暗い失望と崩壊の時代)の再来があるかもしれない。とすると、それでは、どこにもないユートピアでなく、反ユートピア、つまりどこにもあるありふれたもの、という意味の状態が出現することになるのであるだろうか。

第一〇は、「個人の勝利」(Triumph of individuals)と云うことである。

個人の勝利といっても、すべては自分のために、というようなエゴイスティックな個人主義ではない。それは「個人から地球へ」と上るような開かれた哲学でなければならぬ。

こうして、グローバル経済が発展すればするだけ、個人主義が重要となり、強力となる。そこで、コミュニティの形成が必要となるというのが、ネイスビッツらの予想である。

個人の力は、技術によりアップする。グローバル・テレビやビデオは、旧来のブロード・カースト(放送)と、新たなナロウ・カースト(?)の双方を促進する。ビデオなどを通じ、個人がブロード・カースト者となる。つまり個人からネットワークへとコミュニケーションするという個人の拡大が始まる。いわゆるエレクトロニック・ハーランドは、エレクトロニック・コテージではない。より多くの接触をとまう仕事に人々は魅力を感じるからである。個人の勝利とコミュニティの創造とは、不可分となる。

この点、興味深い事実があるという。従来、力というものは社会の制度や地位に結び付いていた。物理的あるいは軍事的な力とも結び付いていた。だが、ネイスビッツたちによると、そうした結び付きの種類が変わるといえるのである。

たしかに、芸術家のネットワークを見ると、芸術家は多くの人がエンジョイできて、しかし究極的には個人ごと別々に経験でき、評価できるような作品とかパフォーマンスをつくりだしている。これは将来への重大なヒントではないだろうか。将来の人類社会は、芸術的社会となるのではなからうか。すなわち、

①生産は個性的に、しかも少量だけ行う。芸術作品は、本来、多品種少量生産である。

②次に、流通と消費は大衆向けに行われ、大衆の需要に応える。

③しかも、消費は個性的に行われる。芸術は、音楽の楽譜がそうであるように、不完全記号である。解説する

もの、鑑賞するものが、ある程度自由に解釈をいれて味わい楽しむことができる。

これは、来るべき時代の生産とコミュニケーションの方式であろうと考えられる。人間は、頭の中のデザインを技術として外部に表し、それを制作といい、演奏という。そうした制作や演奏を、つまりポイエーシスやパフォーマンスを、思いを入れて解釈し、自己の一部として同化し、あるいは自己をそれに同化し、他者との共存を成し遂げて行くのであろう。本来これがコミュニケーション的存在としての人間の在り方であろう。芸術はそれを本来的に担当する領域であったが、これからは全生活が芸術化するのではないか。

とまれ、ネイスビッツたちは、社会の責任とは、このような個人の創意に報いることであるという。そして、これからは、企業の芸術家が登場するであろうという。すなわち芸術の分野で企業家的精神が必要となるのである。他方、政治では、政党政治への不信、企業家的政治への希望が高まるであろうという。

もちろん、九〇年代にも多くの障害が待ち構えている。環境問題、ガン、エイズなどがそれである。がしかし、ポスト冷戦時代には、米国とソ連が環境と貧困の問題に協力して取り組むであろうとも述べる。

#### 四、われわれの人間の課題

以上が、アメリカの論者の九〇年代文明論の骨子である。ドラッカーのいわゆる「社会による救済」の失敗という指摘と、ネイスビッツらのいう「個人の勝利」とは、まことに裏腹の関係にある。個人が勝利すると見るからには、個人としての何等かの救いが可能となるのでなくてはならない。ブルームは個人の価値観の相対性を見るから、問題はあくまでも個人の内にある。フクヤマもアメリカ独立宣言に謳われたような個人主義的自由主義の理念の勝利をいうからには、やはり個人のあり方にかけている。

みんな、同じ人間的自由への問いを巡って時代を洞察しようとしているのである。だからわれわれも、そのような考察を避けて通るわけにはいかない。日米は相互にのつびきならない相手だからである。

だがしかし、それは古い現実としての単なる古典的な自由主義への回帰ではありえないであろう。それが言い出された頃とは、科学技術や政治経済的条件が変じている。はたしてそこで、フクヤマ氏のいう「自由主義理念の勝利」は、現実となるかどうか。

ドラッカーが述べるように、自由とか平等というにしても、人類の生活のどのような領域でそれが問われるのか、それが問題なのであろう。経済的な意味での資本主義と社会主義との競争から、二〇世紀末での社会主義の負けを見る人々にも、もはや経済の領域での自由平等が主たる問題ではなくなり、もつと違った課題が台頭しつつあるのかもしれないのである。気の早い人々は、経済から宗教や精神の時代へともいう。

それは結局、次にどのような人間のニーズが前面に台頭するかにかかっている。知識の領域に移るといふ見方もあろう。財の獲得ゲームから、知識のゲームへという図式である。だが私自身は、徳(virtue)とか品性(character)のゲームになると予想している。徳は、なにか一部の問題ではなく、人間性全体の問題なのである。ゆえに人間性の再建がかかっているのである。

姿も見えず足音も聞こえない歴史の営みを、いかにして洞察するか。否われわれは、人間の問題においては、「どうなるか」というより、自分自身は「どうするか」へと、問いを変えねばならないのかもしれない。歴史の営みの客観的洞察ではなく、われわれによる歴史の意識的な創造こそ、取り組むべき課題なのかもしれない。見るものから造るものへの転換である。「働くものから見るもの」とは、西田幾太郎の言葉だが、今のわれわれには「テオリア」(観照)から「プラクシス」(実践)への高揚が求められるのではないかと考へる。

ゆえに、はじめに取り上げたブルームのアメリカ社会への反省も、実践への指向性をもつべきであった。実践としてのモラルの創造がそれである。それも、一步を踏み出すには、具体的に思考しなければならない。

アメリカにとっては、そのさい当面のモラルの基本は、職業（労働）エートスと家族エートスの、根本からの再建にあるのではないか。それが、生き続けて行かねばならない生命体としての人間の土台にかかわるものだからである。

他方、特に日本人としては、もちろんそうした点もさることながら、むしろ異なる人種や民族といかにしてうまく生きて行くかという点が、のびきならない課題になると予想される。ここでとりあげた論者にはあまりこゝうした議論はなかったが、それはさすがアメリカ社会だからで、人種と民族の問題は、すでに日常のことだからであろう。いま日本人は、外国人労働者の増加に出会い、必然的に民族問題を背負いこまねばならないようになってきている。この分野においては、自由の問題とは、日本人だけが他から独立し自分達だけで自由に暮らして行くという点での、「自由の修正」にほかならないだろう。そして新たな「共生の自由」の創造へと歩まねばなるまい。

しばしば、「グローバルに考え、ローカルに行動せよ」ともいわれるが、その手掛かりはここにあるのではないか。メガトレンドをどう生きるか、その課題と方法は、「個々の自己」から主体的に発する外ない。だがその自己は、グローバル性を自覚した自己でなければならぬことも忘れてはならない。ブルームの批判する「相対性」の時代の個人でなく、「ポスト相対性」の時代の個人が生まれるべきであろう。（一九九〇・三・一八）